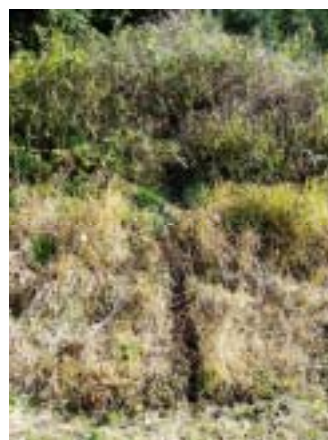


#### 猪4 猪垣のこと = = = 猪・鹿・狸より

猪の出る路をウツと言うた。猪は田や畑に出るにも、かならずウツを通ったので、オトシアナはウツをめぐめて設けたのである。自分が子供の頃には、畑続きの木立の中に、半ば崩れかけたのがまだ幾カ所も残っていた。多く畑から数間もしくは十数間ぐらい入り込んだ所で、穴の直径六尺ぐらいで、深さは二間もあった。朋輩の一人が、過って墜ちて弱ったことがある。

オトシアナは猪を防ぐために設けたのであったが、一方それで猪を捕る狩人もあった。上に細い横木を渡して、萱薄などを敷いておき、底にはヤトを一面に立てておいた。老人の話によると、同じ狩人の中でも腕に自慢の者がやることではなかった。捕れた獲物も多くは子猪ばかりで、親猪は滅多にかからなんだと言う。子猪のことを別にウリンボウと言うたが、ウリンボウがヤトにうまくかかったところは、盆の精霊送りに、爪に麻稈を通したそのままであったと言う。これは祖母から聞いた話であった。ある時隣家のオトシアナへ、巨猪が陥ちてヤトを三本も負いながら、盛んに荒れていて困ったことがあった。近所のものが集まって、石撲にしてやっと斃したと言う。どこの家でも屋敷の後ろには、きまってオトシアナが設けてあったのである。

オトシアナへは猪の他に、もちろん他の獣もかかったが、特に山犬の陥ちた話が遺っている。もう四五、六年も前であるが、鳳来寺山麓の吉田屋某の裏手の穴へ陥ちたことがあった。村の者が多数集まって藤蔓の畚を作って、その四隅に長い綱をつけて穴の中へ下げてやると、山犬がそれに乗ったと謂う。それで早速引き揚げて遁してやった。翌日その穴へ大鹿が落とし込んであったのは、言うまでもなくお礼心であった。



##### 猪の通り道（ウツ）

猪は必ずボロから田圃への最短距離を通る。ボロの中を覗くと、下草が分れていて、猪の体の大きさのトンネルになっている。

私の子供の頃にも、畑の奥の裏山にオトシアナが掘ってあった。ただ子供が落ちると危ないと言って、穴の中にヤトの類いはなかったと思う。

山犬がオトシアナへ陥ちた時は、中で盛んに吠えたと言う。自分の家の地類である某の男は、豪胆で聞こえた狩人だった。ある時屋敷裏のオトシアナへ山犬がかかった時、中へ梯子を降ろして降りていって、山犬を片手に抱いて上がって来た。そのまま放してやると、犬は嬉しそうに尾を振ってその場を去ったが、並みいる村の者もその豪胆さにはたまげたとする。山犬が少しも抵抗せなんだのは、最初ムズを含めたためだと言うが、ムズのことは判然と知らぬ。あるいは抵抗せぬための呪いとも言うた。明治になる少し前のことで、翌日大鹿が投げ込んであったことは前の話と同じである。

話の枝が余計な方向へ伸びてしまったが、オトシアナとは別に、田や畑をめぐって深い堀が穿ってあった。猪除けが目的であったことは言うまでもない。だんだん埋められて今に残っているのはごく稀であった。ただホリンポーなどと呼んだがあるいは別の名称があったかと思う。その外側には高い垣根が築いてあった。多く石を積み上げたもので、猪除けの垣根と言うが、あるいはまた



ワチとも言うた。しかし一般にワチと呼んでいたのは、焼畑にめぐらした垣の謂であった。二本ずつ杭を打って、それを骨組みとして、横木をたがいちがいに組んでいったものである。また焼畑でなくても、山村の畑には、多くワチがめぐらしてあった。この方は焼畑とちがって、頑丈な杭を隙間なく打った半永久的な柵で、材料は栗の木を割った角であった。

破れたところから杭を補ってゆくので、処々色が変わっていたりした。多くは山のサガ畑で、街道などから望むと、遙かな山の半面に、年を経て真っ白に晒されたワチの中に、青い麦のウネが段々に続いていたりして、一種なつかしいものであった。